翻訳と言語学の接点：
英語・フランス語における冠詞の総称的用法の考察

関　口　智　子

1．はじめに

翻訳は、一部機械翻訳が可能になった現在でも、あらゆる分野で実用的で重要な活動である。しかし、歴史的に見ると、この言葉の操作にもとづく活動は、長い間職業的経験主義のレベルに留められてきた。翻訳作業の科学的研究を言語学の一部門とすべきかどうかは、いまだに議論の的になっている。翻訳には、語彙、形態、統語、文体等様々なレベルにおける障害が存在する。言語間の距離が大きければ大きいほど障害が大きいのも事実である。日本語と英語の翻訳に関して、英日翻訳および日英翻訳それぞれに特有の諸問題が指摘されている。英語から日本語に翻訳する場合と、日本語から英語に翻訳する場合に共有される問題もあるが、英日翻訳では遭遇しなかった日英翻訳独特の問題も数多くある。例えば、主語が省略されている日本文に対して、英訳では何を主語とするのか、また日本語に特有な敬語表現、女性ことば・男性ことばをどう適切に訳すかなどの問題は、常に翻訳者の頭を痛めている。

本稿では、数ある翻訳上の諸問題の中でも、日英翻訳の問題の一つである冠詞の使い分けに焦点をあてる。例えば、以下のような短い日本文を英訳してみよう。

(1)　a．私は<u>映画</u>が好きです。

　　b．I like <u>movies</u>.

上の例文の「映画」の訳として、a movieを使って、“I like a movie.”と言うことはできない。「映画が好きだ」という場合には、ある特定の一つの映画が好きなのではなく、映画というものの総称が好きだという意味であるから、複数形のmoviesが使われる。一方、「映画が観たい」という場合なら、一つでもいいから何か映画を観たいという意味に解釈できるので、単数形のa movieが適切である。日本人の英語学習者は、上の(1)の意味で“I like movie.”という表現を頻繁に用いるが、英語の可算名詞の単数と複数の使い分けのみならず、可算名詞には単数の場合冠詞が必要であることも定着していないようである。また、“I like a movie.”、“I like the movie.”、“I like movies.”の意味の違いも十分把握されているとは言いがたい。

以上概観したように、冠詞のある言語では、冠詞の意味と機能は、正確にメッセージを伝達する

せきぐちともこ：本学兼任講師

上で非常に重要な役割を担っている。冠詞の存在しない日本語を母語とする者にとっては、冠詞の正確な理解は大変困難であるが、翻訳では避けては通れないものである。本稿では、冠詞のある言語、英語とフランス語に焦点をあて、特に総称的概念が日本語から英訳および仏訳される際の冠詞の用法を詳しく考察してみたい。

2．英語とフランス語の冠詞： 概論

日本語で「馬は有用な動物である」という場合、「馬」という単語によって、「馬と呼ばれているもの」すべてに言及している。このような用法は「総称的用法」と呼ばれている。この日本文を英語とフランス語に翻訳すると以下のように表現される。

(2) a．馬は有用な動物である。

b．<u>The horse</u> is a useful animal.

c．<u>Le cheval</u> est un animal utile.

上の例に見られるように、英語でもフランス語でも、定冠詞単数（英語では the、フランス語では le）によって「馬というもの」の総称を表している。この例では英仏の使用している冠詞の種類・数が一致しているが、与えられた日本文に対する英訳、仏訳はこれだけではない。両言語とも複数形を用いて総称の概念を表現することができるが、英語とフランス語では、冠詞の使用に食い違いが生じてくる。

(3) a．馬は有用な動物である。

b．<u>Horses</u> are useful animals.

c．<u>Les chevaux</u> sont des animaux utiles.

複数形を使うと、英語では冠詞を伴わない複数名詞（horses）を用いるのに対し、フランス語では定冠詞をともなった複数名詞（les chevaux）を用いる。本稿では、英語およびフランス語の定冠詞・不定冠詞の機能を比較し、両言語における冠詞による総称表現の違いを考察する。調査の観点は具体的には以下の２つである。

１）英語およびフランス語における定冠詞（単数・複数）、不定冠詞（単数・複数）、無冠詞の使用頻度の違いを調査する。 ---------- 量的考察

2）英語およびフランス語における冠詞の使い分けによってもたらされる意味の違いを考察する。

---------- 質的考察

本調査は、英仏揃った同一の文典から総称的用法を抜き出し、比較考察をするという手法をとった。川端康成作『雪国』と、Seidensticker による英訳 *Snow Country* と、Guerne・藤森丈吉による仏訳 *Pays de Neige* を採用した。日本語原典を基盤とした理由は、正確に「総称」を識別するには、母語である日本語に頼るのが一番と考えたからである。また、著名な日本文学から採用したのは、英訳および仏訳が揃いやすいためである。『雪国』は、1955年にユネスコの国際ペンクラブの推薦図書に選ばれたのを契機に、まず Seidensticker により英訳された。仏訳の方はそれ以後になるが、英訳ではなく日本語原典をもとに翻訳されたものである。

3．冠詞の総称的用法

3．1　「総称」の定義

松原秀治著『フランス語の冠詞』によれば、「《総称》とは、ある名詞（概念）が示すもの全体をとり上げることである」とある。以下、松原氏による総称の定義を引用する。

> 「例えば、《鳥》という概念は、温血、卵生で、翼を持つなどの属性（内包）を持っている。またそれと同時に、同様な内包を持つワシとかスズメとかの種々の個物（外延）を含んでいる。それゆえ、ある概念について、この内包と外延のどちらを主として考えているかということは、だいたい冠詞によって示されている。（おおよその場合、定冠詞の単数が内包、複数が外延）」（p.57）

他に定冠詞の総称的用法について、朝倉季雄著『フランス語文法事典』を参照すると、定冠詞の一用法として次のような記述がある。

> 「単数定冠詞は抽象的に考えた種の名称を、複数定冠詞は種を構成する各個体の総和を表わす。例えば、（不定冠詞を用いた）une table, des tables は机と名づけられるものの任意の一個・数個を表わすのに対し、（定冠詞を用いた）les tables は個々の机の個別性を度外視して、その共通の属性のみを考えた抽象的概念である。」（p.59）

朝倉氏の定義を前出の松原氏のものと比べてみると、朝倉氏の言う「抽象的に考えた種」が、松原氏の言う「属性（内包）」に相当し、朝倉氏の「種を構成する各個体の総和」が、松原氏の種々の個物を指す「外延」に相当しているのがわかる。両氏の定義は用語こそ違うが、同じ概念を意味している。このように「総称」と言っても、単に事物の総和体という概念にとどまらず、松原氏の用語を借りるならば、「内包」と「外延」という2つの異質のものを含んでいるのである。本調査

でも、以上のような両氏の定義に則り、「抽象的に考えた種」「属性（内包）」と「種を構成する各個体の総和」「外延」、この2種を総称と見なし分析を試みる。

3．2　英語の総称的用法

英語では、冠詞を用いた表現として以下の5通りが可能である。

1）	定冠詞単数	the ＋ 単数形	例：the horse
2）	定冠詞複数	the ＋ 複数形	例：the horses
3）	不定冠詞単数	a ＋ 単数形	例：a horse
4）	不定冠詞複数（＝ 無冠詞複数）		
		ϕ ＋ 複数形	例：horses
5）	無冠詞	ϕ ＋ 単数形	例：horse

定冠詞単数（the horse）が形式的、文語的であるのに対して、不定冠詞単数（a horse）は実際的、口語的な表現であるとされる。英語には不定冠詞の複数形が存在せず、無冠詞つまりゼロ冠詞がその代用をしているので、本稿では無冠詞複数を不定冠詞複数（horses）と見なして扱う。したがって、本稿では無冠詞とは純粋に名詞の原形のみで使われている場合を指す。英語では、不定冠詞複数は総称としての種属ではなく、種属の個々のすべてのメンバーを指すと言われている。その意味で、真の総称とは言い難いにもかかわらず、この形態は口語で通常用いられる傾向にある。

定冠詞複数（the horses）は、後述する特殊な場合を除いては、総称的には用いられない。英語では、定冠詞が名詞の複数形につくと、特定化されたグループの構成員に限定することになるからである。定冠詞複数“the horses”は、文脈上聞き手（読み手）に明らかな複数の馬の集合体を表わす。定冠詞複数が総称的に用いられる特殊な場合とは、the English（英国人）や the elderly（高齢者）などのように、定冠詞 the が形容詞についた表現である。この場合、名詞的に使われている形容詞は複数形を取らないが、複数の概念を表わしている。

最後の無冠詞の用法であるが、英語では man（「男」または「人間」の意）と woman（「女」の意）の2語に限られる特殊な場合とされる。

3．3　フランス語の総称的用法

フランス語では、冠詞を用いた表現に以下の5通りが考えられる。

1）	定冠詞単数	le（la）＋ 単数形	例：le cheval
2）	定冠詞複数	les ＋ 複数形	例：les chevaux
3）	不定冠詞単数	un（une）＋ 単数形	例：un cheval
4）	不定冠詞複数	des ＋ 複数形	例：des chevaux

5）無冠詞　　ϕ ＋ 単数形　　例：cheval

まず、定冠詞については、朝倉氏の『フランス語文法事典』によれば、5つの用法中第3番目に「総称的意味を表わす」とあり、数々の例文とともに詳細に解説されている。これに対し、不定冠詞は7つの用法中第5番目に補足的に触れられているにすぎない。以下は、不定冠詞の総称的用法に関する記述である。

「5° 不特定な一個体が同種属の他のすべての個体を代表することがある。この場合、不定冠詞は総称を表わし、定冠詞を用いても意味の変わりはない：

Un homme ne pleure pas. (GREEN, Moïra, 82)
[男というものは泣くものじゃない]

この用法は多くun, uneに限られ、その複数形はdesではなくles。」(p.61)

以上の不定冠詞に関する引用の中で、特に「この場合、不定冠詞は総称を表わし、定冠詞を用いても意味の変わりはない」という記述から、不定冠詞においては、定冠詞と比べて総称的用法の占めるウエイトが小さいという予測がたてられる。このことを裏付けるように、松原氏も「総称は普通、定冠詞で表わされる」と明言しており、補足的に「総称は不定冠詞で表わされる場合がある」と述べるにとどまっている。次に、定冠詞の単数と複数の使い分けが問題になってくるが、この点に関してはどの文献にも明確な記述はなく、主に名詞のとり上げ方に依存しているということしかできない。

不定冠詞の複数形に関しては、新倉氏他による『フランス語ハンドブック』に、以下のような記述がある。

「<des＋名詞> で示されたものは、数・内容ともに不定であり、次例のdes élèvesは、何人であるかも、だれとだれであるかも明示しない。desには定冠詞lesに見られる総称的用法はない。

Des élèves sont absents.
（何人かの）生徒が休んでいる。

cf. Les élèves sont absents.
（クラスの）生徒たちは（みな）休んでいる。」(p.12)

以上のことを、前出の朝倉氏の不定冠詞に関する記述と合わせて考えると、原則として不定冠詞複数は、総称的には用いられないと言ってよいであろう。

最後に、英語と異なり、フランス語では無冠詞名詞は総称としてとり上げられない。これは、フランス語の無冠詞名詞、つまり単なる単語としての名詞は、無象であるため思考の対象にはなりえないからである。フランス語では、名詞は冠詞に先立たれてはじめて思考の対象となることができるのである。

4．調査結果

4．1　量的考察

では、調査結果をいくつか例文を引用しながら考察してみよう。英語およびフランス語における冠詞の総称的用法使用頻度は以下のグラフの通りである。グラフ内の数値は、全76例中の数および全体に占める割合を示している。

表1　総称的用法の冠詞使用の内訳：英語

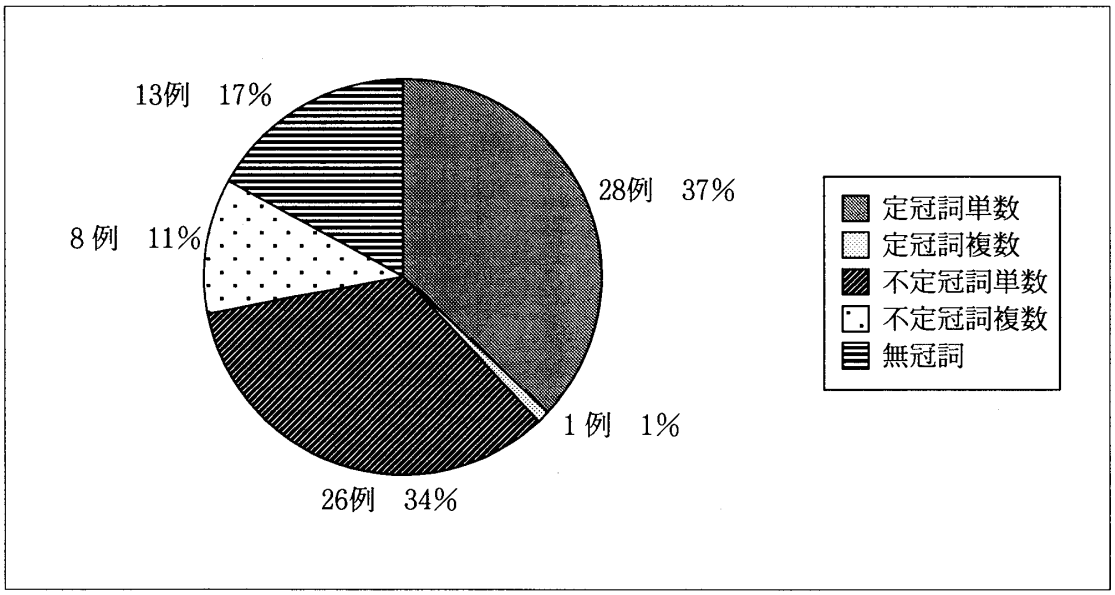
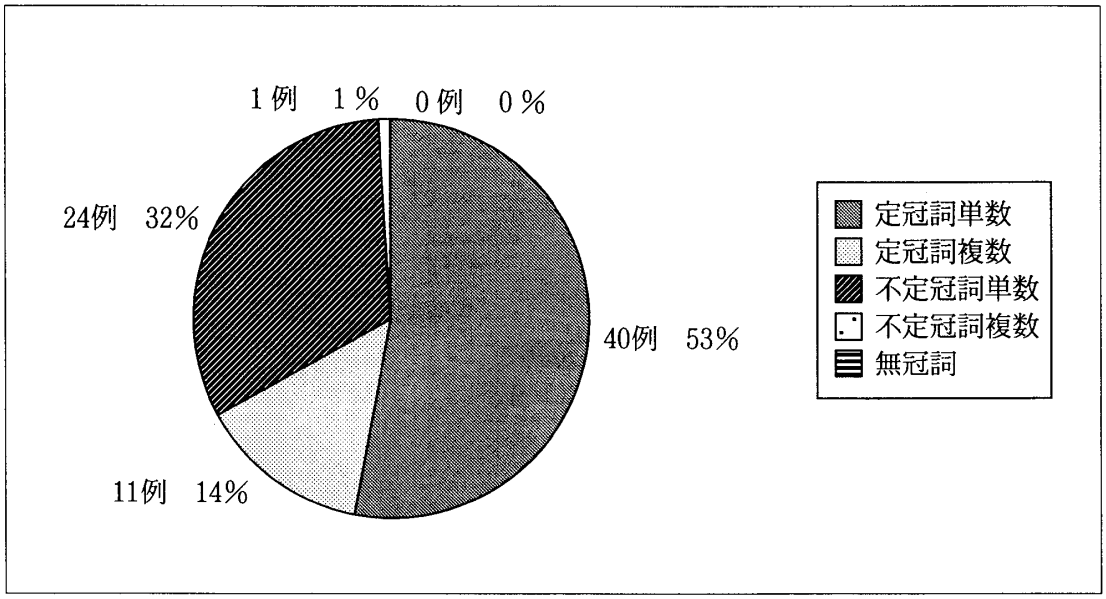


表 2　総称的用法の冠詞使用の内訳：フランス語



冠詞別使用頻度順位は以下の表にまとめられる。

表 3　冠詞の総称的用法使用頻度：調査結果

	定冠詞		不定冠詞		無冠詞
	単数	複数	単数	複数	
英語	**1 位** (28 例)	(1 例)	**2 位** (26 例)	**4 位** (8 例)	**3 位** (13 例)
フランス語	**1 位** (40 例)	**3 位** (11 例)	**2 位** (24 例)	(1 例)	(0 例)

上の表に見られるように英仏とも、定冠詞単数が最も多く、次いで不定冠詞単数が使用されている。本調査では、英語もフランス語も、総称的用法には好んで単数形を使用する傾向にあると言える。

数値的に比較するために、定冠詞、不定冠詞を単数・複数別に集計してみよう。フランス語では、76例中単数が64例（84％）を占め、複数はわずかに12例（16％）である。一方、英語でも単数は76例中54例（71％）と、複数の９例（12％）に大きく差をつけている。原則として、英語では定冠詞複数、フランス語では不定冠詞複数は総称として用いられないため、これも当然の結果と言えよう。本調査では、それぞれ1例ずつ使用が観察されたが、後ほど解説するように例外的な用法とみなす

ことができる。

一方、予測に反して、意外な現象が英仏訳それぞれに観察された。まず、仏訳において、定冠詞複数の使用が思っていたほど多くは見られなかったということである。定冠詞の単数と複数の割合を見ると、単数40例（63%）に対して、複数は11例（14%）で、単数のわずか4分の1である。定冠詞の単数と複数の使い分けに関与する要素として、対象とする名詞（実体）のとり上げ方、訳者の視点が考えられる。本調査の対象となった仏訳では、定冠詞単数によって示される「内包」の方が、同複数によって示される「外延」よりも多かったということになる。言い換えれば、ある事物の抽象的な属性を問題にしている場合が多く、逆に事物の具体的な個々の集まり、事物全体をとらえている場合が少なかったということである。これは、『雪国』という文学作品のもつ性格から来る当然の帰結と言えるかもしれない。舞踊研究家島村と、彼が心を引かれて数年のうちに何度も訪れる雪国の芸者駒子、その妹分の葉子、この3人を主要な登場人物とするこの小説が描き出そうとしたのは、美の追求者である島村によってとらえられる純粋な女の生命の美しさと言われている。そのため、自然描写、人物描写、そして心理描写全般にわたって、抽象的、比喩的な表現が多く、これが定冠詞単数の多用につながったと思われる。

次に英訳に関しては、2つほど意外な現象が観察された。第1点は、不定冠詞複数の使用頻度が、定冠詞単数および不定冠詞単数に比べてかなり低いこと、第2点は、man とwoman の2語に限られていたはずの無冠詞が、これ以外の名詞にも使用され、不定冠詞複数の使用を上回っていることである。第1点に関して数値的に分析してみると、定冠詞単数が28例（37%）、不定冠詞単数が26例（34%）であるのに対し、不定冠詞複数は8例（11%）であった。不定冠詞複数が、双方の3分の1以下とはどういうことであろうか。これに関しては、仏訳の解説でも触れたように、『雪国』が多分に抽象性を帯びた作品であること、また純粋な古典的文学作品のため、堅苦しい形式的な文体が使用されていることから、定冠詞単数が多用されたものと推測できる。第2点に関しては、真の無冠詞というよりも、前置詞の直後において冠詞が省略される「冠詞省略」という現象が多発していたことが原因と考えられる。13例中、man の特別用法が2例、前置詞句における冠詞省略が9例、その他の冠詞省略が2例であった。原作では、比喩を表わす表現が多く、特に前置詞 like（～のように）の使用が目立ち、この前置詞の後ではしばしば冠詞が省略されている。

4．2 例外的用法の解説

まず、英語の定冠詞複数の例外的な総称的用法の用例を、日本語原文、および仏訳とともに以下に引用する。

(4) a．あけびの<u>新芽</u>も間もなく食膳に見られなくなる。

b．Presently <u>the new sprouts</u> would be gone from the table.

c. ;quand les jeunes pousses d' akebi déjà vont cesser d' apparaître sur les tables pour agrémenter le menu.

英訳では「あけび」が省略されているが、英仏とも名詞が「新しい」という意味の形容詞を伴い、the new strouts, les jeunes pousses で一つの概念「新芽」を表わしている。これは、「(あけびの) 新芽」全体を意味する「外延」の総称的用法である。英訳では、「the＋形容詞」の場合のみに限られるという原則に反して定冠詞複数が用いられている。この点に関して、一色氏の『冠詞』は以下のように解説している。

> 「名詞の複数形にthe がついて総称の意味を表わすことは、Bacon などのような古いものにはあった。Jespersen はこれは『他のいずれの表現よりも一層判然と、科学的な描写法において種属全体を表わしている』と言っている」(p.18-19)

学術的な文体で、種属の全体性を明示するために用いられるという Jespersen による例文は次のようなものである。

(5) The owls have large eyes and soft plumage.

一色氏は、the が複数の名詞につく場合は、特に既知のある事物全体を指すことが多く、結局は文脈によって総称か否かは決せられるものだという。このような見解にもとづけば、この英訳者は「(あけびの) 新芽」をその地方の人々には日常親しんでいる身近な食物、彼らにとっては周知のものととらえ、この the＋複数形を使用したと考えることがでる。しかし、このような用例は、全英訳を通してたった1例しか見られないので、やはり例外的な用法と見なしてよいであろう。

ついでに、上記の英仏訳中の「食膳」にあたる表現に注目してみよう。英語では定冠詞単数 the table、フランス語では同じく定冠詞を用いているが複数 les tables で表現されている。どちらも、どこか特定の「食膳」ではなく、一般的な食膳を意味している。ここで、英語でもフランス語のように定冠詞複数を使って、the tables と表現してしまうと、前述のように限定されたテーブルの集合を指すと解釈される危険がある。そこで総称的に表現するならば a table、tables、the table の3つの選択肢があるが、その中でも英訳者が the table を用いたのは、「テーブル」の具体的な姿・形よりも、テーブルのもつ抽象的な属性、食事をする場としての「食膳」というイメージを読者に想起させたかったからであろう。逆に、仏訳の方では、個々の集まりという側面を強調する複数形を用いているので、各家庭にある様々な食卓の具象的な姿を連想させているのだと思われる。

もう1例、推測に反して使われていたものは仏訳における不定冠詞複数の使用である。

(6) a. .....黒墨のようである。

b. .....aussi noire que des pierres à encre.

c. (less a moist black from the melting snow) than an ink-stone black.

前出の新倉氏の説によれば、フランス語の不定冠詞複数は、数・内容とも不定であり、定冠詞複数に見られるような総称的用法はないということになっていた。日本語原文の「黒墨のよう」は比喩用法であるから、黒墨が総称的にとらえられていることは明らかである。松原氏の文献に見られる以下の記述が、この問題解決の糸口になると思われる。

> 「des を使えば、いろいろなものを含むが、必ずしも全部に及ばなくてもよいということがわかる。..... 場合によってはlesもdesも使えるが、desを使えばその表わすものの特殊性がわずかではあるがより浮き立ってくる。」(p.99)

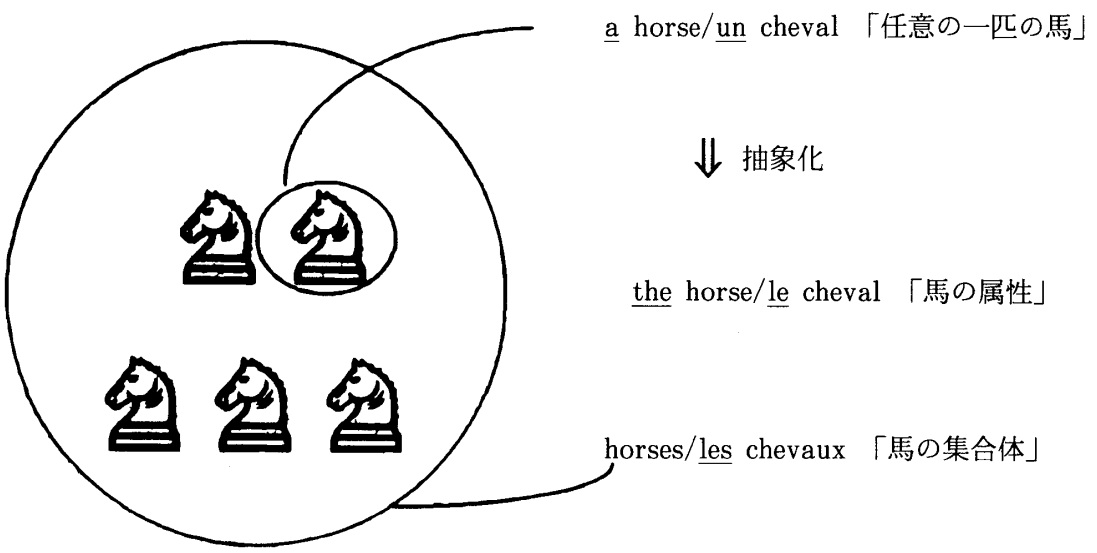
この見解にもとづけば、仏訳者は数あるpierre（石）の中でも特にencre（墨）に用いられるものという特殊性を強調したかったと解釈できよう。

4. 3 質的考察

英語とフランス語の冠詞の総称的用法を意味のレベルで対比させてみよう。

英語		フランス語	意味
定冠詞単数 the	--------	定冠詞単数 le, la	属性
不定冠詞単数 a	--------	不定冠詞単数 un, une	種属の中の任意の1つ
不定(無)冠詞複数 ϕ	--------	定冠詞複数 les	個々の総和

種属の「属性」と、その中からとり上げた「任意の1つ」を意味する場合には、英仏それぞれ同種の冠詞が対応している。しかし、種属を「個々の事物の総和」として考える場合には、同じ複数でも、英語では不定冠詞（無冠詞)、フランス語では定冠詞を使用するという1点だけが食い違っている。一方、英語の定冠詞複数とフランス語の不定冠詞複数desは、原則として総称的用法には用いられない。しかしこの2つの冠詞は、純粋の総称としては使われないが、限られたものの全体を示すという点で共通である。上述の英仏3組の冠詞のペアの視点を、以下のように図示してみることができる。



5．結　論

本調査では、フランス語では定冠詞（単数および複数）と不定冠詞（単数）の使用頻度の格差が大きかったことから、総称的用法に関しては定冠詞の使用が顕著であったと言うことができる。これに対し英語では、定冠詞単数、不定冠詞（単数および複数）の使用頻度は文中の位置による統語的影響も関与し、一概には決定しにくいという結果であった。本稿では、翻訳における諸問題の中でも、特に文法領域に属する冠詞の使用に焦点をあてた。これは、山積する翻訳上の障害の氷山の一角にすぎないかもしれない。しかし、さらに語彙論、形態論、統語論、意味論、文体論、談話構造等の問題を科学的に分析することによって、翻訳は質の向上をはかれる言語的作業となるであろう。

【参考文献】

川端康成『雪国』《角川文庫》（角川書店　1956）
Guerne, A.・藤森丈吉共訳　*Pays de Neige*（Albin Michel 1960）
Saidensticker, E. G. 訳　*Snow Country*（Charles E. Tuttle Company 1957）

朝倉　季雄　『フランス語文法事典』（白水社 1955）
一色マサ子　『冠詞』《英文法シリーズ》（研究社 1954）
江川泰一郎　『冠詞・形容詞・副詞の用法』（研究社 1961）
川本　茂雄　『英語からフランス語へ』《フランス語<青春>文庫》（第三書房 1963）
川本　茂雄　『フランス語統辞法』（白水社 1982）
北林　利治・杉山泰・リチャード・ボナン・西村友美『初めて学ぶ翻訳と通訳』（松柏社 2003）
小稲　義男　『冠詞・形容詞・副詞』《現代英文法講座２》（研究社 1958）
新倉俊一他　『フランス語ハンドブック』（白水社 1978）
松原　秀治　『フランス語の冠詞』（白水社　1978）
宮下　真二　『英語文法批判』（日本翻訳家養成センター 1982）
鷲尾　　猛　『フランス語冠詞の話』《大学書林語学文庫》（大学書林 1960）